さいたま市立宮原小学校
学校だより
令和7年8月27日　第5号

学校教育目標
・たがいに努める子(やる気)・たがいにきたえる子(元気)・たがいに手をとる子(勇気)

やる気

井　上　　雅　史

３９日間の夏休みが終わり、２学期が始まりました。新しい学期の始まりを楽しみにしていた児童もいると思います。一方、心身ともにすっかり休みモードとなって、何となくだるくて「やる気」が起きにくいという児童もいるでしょう。

「やる気」とは、物事を進んで成し遂げようとする気持ちや欲求のことです。モチベーション（動機づけ）とも言われています。「やる気」は協力と成長の原動力です。学校では児童同士や、教師と児童のよい関係をつくり、学びの質を高める鍵となります。

この「やる気」が高まっていくと、次のような良さがあると言われています。

○ 学習意欲の向上　：進んで課題に取り組み、失敗を恐れず挑戦するようになる。
○ 協力関係の深化　：他の人との協力に前向きになり、互いに支え合う文化が育つ。
○ 自己肯定感の向上：やる気をもって取り組むことで、達成感を感じて自信が育つ。

「自分が楽しいから」「やりがいがあるから」などの自分の興味や好奇心をもとに「やる気」が湧き上がってくることがあります。この「やる気」は、集中力や創造力が長期間発揮されます。しかし、この「やる気」は、基本的には自然と湧いてくるもので、意図的につくりだすことが難しいとされています。

一方、児童のやる気を高めるために、ご褒美や評価、又は罰を与えるということも考えられます。これは、目標が具体的になって児童の「やる気」を高めやすくなります。ただし、デメリットとして、自分の内側からやる気を高めた場合と比べると、「やる気」が持続しにくいそうです。また、周りから与えられる目標や評価が行動の軸となるために、自主性が損なわれてしまうこともあるそうです。

どちらが良い悪いということではありません。ご褒美や評価によって高まった「やる気」をきっかけにして、興味や好奇心をもち、更にやる気が高まることもあります。

また「やる気」が起きなくても、とにかく５分取り組めば脳が刺激されて「やる気」が湧くとも言われています。

「やる気」は一人ひとりの内面から湧き上がるものです。自然と湧いてくることが理想的ですが、それを待っているだけではなく、行動をし、自分の置かれた環境や周りの人との関わりの中で、自分自身でさらに大きく育てていくことも大切だと言われています。そうならば、学校や家庭、児童の生活するすべての場所は、児童の「やる気の種」を育てる畑のようなものとも言えるのではないでしょうか。教師、保護者、地域、児童が一体となって、児童の「やる気」を育み、未来を担う力を育てていくことができたら素晴らしいと思います。

我々教職員は元気な子どもたちと再び顔を合わせ、一緒に学校生活を送ることを楽しみにしていました。今日から学校生活のリズムを徐々に取り戻しながら、改めて全ての児童が「やる気・元気・勇気」をもって笑顔で過ごせる教育活動を全員で力を合わせて進めてまいります。